

氏名	しょう じ だい すけ 庄 子 大 亮
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 400 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	古 代 ギ リ シ ア に お け る 神 話 ・ 伝 説 の 創 造 と 機 能

(主 査)  
論文調査委員 教授 南川高志 教授 服部良久 教授 中務哲郎 教授 小山 哲

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、古代ギリシア（ここでは前8～前4世紀とする）における「神話」の創造と機能について、歴史学の立場からその背景を考察し、ギリシア人の世界認識と自己理解、そして心性について理解を深めることである。ここではとくに、その豊富さにおいてギリシア神話の特徴といえる、太古の人間たちについての物語である「伝説」を考察の対象とした。

古代ギリシアの「伝説」に関しては欧米に膨大な研究の蓄積があるが、本論文において論者は、そうした研究史をふましつつも、以下のような立脚点に立ち、問題を設定する。すなわち、まず、伝説にミュケナイ時代（前17～前12世紀頃）の歴史的記憶を見ろという、19世紀以来根強く残っている傾向に対して批判的な姿勢をとり、伝説が語られた当の時代においてそれがどのような意味をもっていたのかを考察する。さらに、伝説の政治的利用、他者の表象、エスニシティといった観点から研究の進展が見られるなかでもなお十分に明らかにされていない問題点、つまり伝説の創造や変容、受容の背景、そして伝説が及ぼした影響といった点について、さらに検討を加える。

本論文は、研究史と問題の所在を明らかにした長い「序論」と具体的な検討をおこなった本文4章、および全体の考察成果をまとめた「結論」から成る。

まず第1章では、ギリシアと周辺世界とを太古において結びつけた伝説を取り上げる。それは、トロイア戦争に参加したギリシアの英雄たちが、のちに異民族の共同体の祖となったとされる諸伝説である。ギリシアより西方のエトルリアやエペイロスでは、実際に当地の人々によってギリシアの英雄が崇拜されていたことが確認できるが、こうした伝説は、研究史上長らく歴史的記憶の反映と解釈されてきた。しかし、E. J. ビッカーマンは違った観点に立って、ギリシア人が英雄伝説を用いて異民族の先史を理解・説明したと解釈した。さらに、I. マルキンはビッカーマンの解釈を援用のうえ、異民族による伝説受容を強調し、ギリシア人が植民活動を開始して異民族と交流をもつようになる前8世紀より、英雄たちの放浪の物語が異民族の起源の説明を与え、それが受け容れられて、異民族のエスニシティを形作ったと主張した。これに対して、論者は以下のように述べる。すなわち、伝説を歴史的記憶の反映とする見方については、今のところ明確な証拠がなく、また本論文が重視するのは、そのような伝説がどのような意味をもって語られていたのかという点にある。一方、ビッカーマンとマルキンはギリシア人が伝説を用いて異民族の先史を理解・説明したことを強調するが、彼らもそうした傾向自体がどのような歴史的状況に起因するのかについては明らかにしていない。また、ギリシアの伝説が受容されることで異民族のエスニシティが形成されたというマルキンの解釈は、あまりにギリシア中心的であり、いつ頃、どのような人々が、いかなる意味を見出して受容したのか、という受容する側の能動性を軽視している。

こうした問題点をふまえて、論者は次のように伝説の創造と受容の背景を考察した。まず、伝説上の英雄と異民族とを結びつけることは、ギリシア人と周辺世界の諸民族とが本格的に接触した植民時代（前750～前550年頃）において、外延に広がる新しい世界を自身の世界認識のなかに秩序づける試みであったことを、『女の系譜』などの史料をもとに明らかにした。また、エトルリア、ラティウム、エペイロスにおいてギリシアの伝説が受容された背景については次のように論じている。

都市の創建者として、あるいは一族の祖としてギリシアの英雄が受容された背景には、王侯貴族がギリシアとの結びつきを強調し、またギリシアとの関わりをなかで自己の新たなアイデンティティを規定する意味があった。さらに、ギリシアの英雄伝説のなかに自己の起源を遡り、太古からのギリシアとの結びつきを強調することは、自己をギリシア文化の正統な継承者として認識することにつながる。そうした伝説受容の意義は、エトルリア、ラティウム、エペイロス、さらにはローマへと、ギリシア文化が深く浸透し受け継がれていった要因として、重要なものであったとも考えられる。

第2章は、第1章での考察をふまえて、伝説と異民族観の諸相についてさらに検討を加えた。ギリシアでは、オリエントからやってきた英雄が都市を創建したり、王位に就いたりしたという伝説が語られていた。ギリシア文明の起源はオリエントにあると主張して話題となったM. バナールが、その見解の根拠の一つとしたのはこうした伝説であった。第2章では、このように歴史的記憶との関連が議論される伝説について、論者は語られた時代に即しての理解を試みている。まず、エジプトのダナオス、フェニキアのカドモスなど、オリエントからの英雄の渡来伝説は、とくにオリエントと活発に交流し、様々な文化を受容したアルカイック期（前8～前6世紀）の時代状況のもとに理解すべきであると論者は指摘した。第1章での考察を逆照射しつつ、異民族の起源が究極的にはギリシアに吸収されていることを考え合わせるならば、オリエントからの渡来伝説は、過去に遡って他者を自己に関連づけて、その結びつきを強調し、さらには他者を内へと取り込むという世界認識を意味したと解する。また、こうした考察によって、伝説を歴史的記憶に還元することの問題点があたためて浮き彫りになったとみる。こうした伝説の背景にミュケナイ時代の歴史的記憶をとくに想定せずとも、アルカイック期の世界観のもとに創造された物語として理解可能なものであり、オリエントからの渡来伝説は、伝説が事実を伝えていると前提すべきではないことを示す重要な事例でもあると指摘している。

ギリシア人は、ペルシア戦争を契機として、古典期（前5～前4世紀）には異民族を「バルバロイ」として蔑視するようになる。第2章ではさらに、このバルバロイ観にともなう渡来伝説の意味の変容にも考察を展開している。アテナイに史料が集中することもあって、他のポリスにおいて具体的にどのようなバルバロイ観があったのかは定かではないが、アテナイでは、以下のような伝説によって自己を中心とする世界観の形成がなされたと論者はみる。すなわち、他ポリスの偉大な過去ともいえる英雄の系譜の広がりや、バルバロイとの関わりとして否定的評価に転化させる一方で、自国民は原初に大地から生まれて同一の土地に住み続けているというアウトクトネス伝説を、演説などによって喧伝し、純粋なギリシア人たるアテナイ人こそがギリシア文化を体現すると主張したのである。アルカイック期から古典期にかけての、異民族とギリシアの関係、そして異民族観をめぐる大きな歴史的状況の変化を通じて、伝説はギリシア人の世界認識として機能し、文化受容、自己と他者像の形成といった面において、現実に影響を及ぼしたのであった。

こうした伝説がポリスという場においていかなる機能を有したかを考えるため、第3章では伝説形成のプロセスを具体的に把握することが可能と考えられるアテナイの国家的英雄テセウスについて取り上げ、検討している。アテナイを国家として統合して民主政を創始したとされるなど、様々な伝説が創造されたテセウスについて、従来の研究では政治指導者による伝説の利用が想定されてきた。H. ヘルター、W. R. コナーらは、前6世紀中頃の僭主ペイシストラトスとその一族が、自らの業績をテセウスに帰し、伝説上の先行者としてのテセウスという英雄像を作り上げ、自分たちの政策を正当化するとともに自らを英雄化したのだとした。一方、僭主政崩壊後の内乱に勝利して前508年に改革を行い、アテナイ民主政の枠組みを築いたクレイステネスと、彼の属する名門貴族アルクメオニダイが伝説形成に関わったとする見解も出されている。つまり、クレイステネスに対応する英雄として、国家を統合し、国制を変革したテセウス像が作り上げられたとするのである。この説の支持者には、K. シェフォルト、C. スルビヌ・インウッドらがいる。しかし、これらの説には明確な証拠がなく、そうした英雄伝説が影響をもちえる背景についての考察も欠如していた。これらの解釈を批判し、テセウスはポリス市民全体の象徴であったと強調するのがH. J. ウォーカー、S. ミルズらであるが、彼らにしても、いかなる意味において市民がその英雄像を必要としたのか、なぜ太古に遡って伝説が創造されねばならなかったのか、といった点についての検討は不十分であった。

そこで、論者はまず、アテナイの繁栄がテセウス伝説へ投影されていることに着目し、その背景を以下のように明らかにしている。ミュケナイ時代の終焉後、約400年間の暗黒時代を経てからポリスを成立させたギリシア人は、ポリス社会とは異質なミュケナイ時代を、神々の血統を受け継ぐ偉大な英雄たちの生きた時代として捉えていた。このように、偉大な過去

と自分たちの時代との間には断絶感が存在したが、それゆえにこそ偉大な過去は客体化され、当代と過去との結びつきが強く求められた。それゆえに伝説は当代において常に影響力を有していたのである。そして、現実社会において全市民の平等を強調するアテナイ民主政のもとでは、国家の繁栄とポリス市民の誇りを投影して、偉大なテセウスの物語が形成され、その伝説に昇華させる形で市民団全体が称えられたのであった。また、テセウスは民主政理念を形象化する存在ともなった。その民主政創始の伝説は、国制を基礎づけるという意味を有していたのである。さらに、その英雄像は市民の徳の規範として、葬送演説や祭儀といった場において語られて、特に若者たちに向けての教育的意味をもって語り継がれていた。このようなテセウス伝説の共有が、ポリスへの帰属意識の醸成・維持に重要な役割を果たしたのである。従来の研究では、伝説形成と政治指導者の意図との関わりが強調され、無知な民衆は作られた伝説をただ受け入れるのみという前提があるがごとくであったが、そうした見方は一面的であり、このような意味で広く市民がその英雄像を必要としていたのである。

なお、この第3章では、全市民の平等・一体感を重視するアテナイ民主政理念とテセウス伝説との関わりを強調しているが、偉大な過去との結びつきの希求に由来する伝説の創造とその影響力、そして祭儀などの場で物語が浸透していくプロセスは、アテナイ以外の諸伝説にもある程度共通するものとして照射できるであろうと論者は述べている。

最後の第4章において論者は、史上最も有名な伝説の一つであるプラトンのアトランティス物語を考察した。太古に大西洋上に「アトランティス」という島が存在し、栄華を極めたが、傲慢さゆえに神の怒りにふれ、神罰によって一昼夜にして海中に没した、というこの伝説を、プラトンは前360～前350年頃に著した対話篇『ティマイオス』、『クリティアス』において語っていた。この物語は、アトランティス＝ミノア文明説のように、歴史的記憶へと還元する解釈が人口に膾炙している一方、「なぜ語られたのか」という観点から十分に検討されてこなかった象徴的な例でもあると論者はみる。そして、まずP. ヴィダル＝ナケらの先行研究に拠りつつ、以下のことを確認した。その海上支配による繁栄から傲慢に陥り、神罰を受けて滅亡してしまったアトランティスとは、プラトンが批判的に捉えていた現実のアテナイや、オリエントの専制君主国家のイメージが投影された、望ましくない国家像である。そして、アトランティスを撃退する存在として物語に登場する太古のアテナイこそ、プラトンの構想する理想の国制が投影された理想国家なのであった。ヴィダル＝ナケ、C. ギルらは、このプラトンの物語は自らの思想を表現した「知的な遊戯」であるとするが、國方栄二、K. A. モーガンらは、理想国家たる古アテナイの存在を歴史的事実として示すことによって、プラトンが市民たちに国家のあるべき姿の範例を実際に提示しようとしたのだと解釈する。しかし、論者はその物語が語られる文脈、詳細な描写から、プラトンが理想国家の具現化を意図したことを認めるものの、プラトンがこうした国家像を提示するのになぜ伝説という手段を用いたのか、という点が十分に明らかにされていないとし、以下のように論じた。プラトンは対話篇『国家』において神話・伝説批判を展開しているが、その批判を分析すると、それはあくまで倫理的に望ましくない内容についての批判であって、むしろプラトンは、第3章で考察したような市民の規範、教育の手段、国制の基礎づけといった神話・伝説の役割と影響力を認識していたことが明らかとなる。プラトンは、望ましくない内容がある従来の神話・伝説に代わって人々の規範となるような、また国家の在り方を示すような理想国家の物語を創り出そうとした。偉大な足跡を残した哲学者プラトンは、神話をいわばメタレベルから捉え、理想国家構想という壮大な思索を背景に創作を行った特別な例であるかもしれない。しかし、少なくともこの伝説の創造において、その特異さを強調し過ぎるべきではない。プラトンは神話・伝説という当代の思考の枠組みをあくまで意識していたのである。神話の語り手たちがいかに過去にはたらきかけ、伝説を創造するのかについては、このプラトンの例もある程度敷衍することが可能であろう。

以上の諸章で論じた後、論者は次のように成果をまとめている。古代ギリシアにおいて「伝説」は、世界認識として、周辺世界に対する意識、異民族との交流、そしてバルバロイ観、ギリシア文化のイメージ形成の根底において機能していた。ギリシア人の世界観が投影された伝説を解きほぐすことは、地中海世界という視野からギリシアを理解する糸口となって、ギリシア史像の再考にも貢献しえよう。アルカイック期以来の諸伝説を利用、収斂させる形で、古典期のアテナイが自らを中心に世界観を再構築したことは、オリエントとギリシアの歴史が隔てられてきたことと無関係ではない。また、ポリス内に目を向けると、テセウスに示されたように、「伝説」は現実世界における人間の規範、国制の起源、ポリス市民の帰属意識の醸成・維持といった面で、ポリスの在り方を基礎づけるものとして機能していたのであった。そうした機能は、プラトンによる物語の創造にも顕著に見て取ることができた。このように「伝説」は、様々な面でギリシア文明の在り方に影響を

及ぼしていたのであった。

## 論文審査の結果の要旨

古代ギリシア人は、神々や英雄たちが活躍する実に多彩な神話を創造し、発展させた。本論文は、こうした神話が古代ギリシアにおいて創造され機能したその背景を、歴史学の立場から明らかにし、古代ギリシア人の世界認識や自己理解、そして心性を解明することに貢献しようと試みた意欲的な研究である。

ギリシア神話については、西洋古典文学や神話学、あるいは哲学の立場から膨大な研究が積み重ねられてきたが、神話がどのような意味をもって語られるようになり、どのような役割を果たしたかについて、歴史学の立場から本格的な研究がなされることは決して多くはなかった。本論文は、古代ギリシア世界の実態に関する文献学、考古学両方による実証的な歴史研究の成果や、神話をめぐる様々な次元での議論をふまえて、正面から神話の創造と機能を論じたものである。神話が当の時代にいかに語られたかを主要な検討課題とした歴史研究として、本論文はわが国の西洋史学界できわめてユニークな研究であるばかりでなく、検討されるいくつかの重要な論点で、国際的にも独創性を主張しうるものともなっている。

本論文で論者が分析しようと試みたのは、ギリシア神話の中でもひととき豊かな英雄たちの物語たる伝説であるが、従来の研究にはこの伝説について、ミュケナイ時代（前17～前12世紀）の歴史的記憶をみるという傾向があった。これに対して、論者は明確に批判的な立場に立つ。それによって、従来の伝説をめぐる諸研究の難点が指摘され、新しい解釈への糸口が提示されることとなった。たとえば、話題を呼んだ政治学者 M. バナールの『黒いアテナ』の議論の欠陥も明らかにされている。古代ギリシア文明の起源はエジプトとフェニキアであり、古代ギリシア人もそれを認めていたが、その事実が近代ヨーロッパ人によって隠蔽されたとバナールは主張した。しかし、論者は、ヨーロッパ中心主義的なギリシア文明理解を批判しようとしたバナールの姿勢を認めつつも、オリエン特からギリシアへ渡来し王となったという英雄の伝説をミュケナイ時代の歴史的記憶へと直接に還元する、あまりに単純なものと批判し、そうした伝説を、ギリシア人の世界認識形成に関連させて論じている。イーディス・ホルのバナール説批判をさらに進めたばかりでなく、ギリシア人の異民族観（否定的バルバロイ観）の形成、自分たちこそ純粋なギリシア人としてギリシア文化を体現するとのアテナイ人たちの主張（アウトクトネス伝説）にまで立ち入って分析し、伝説がギリシア人の世界認識の根底にあって機能していたことを具体的に明らかにした本論文第2章の意義は大きい。

ギリシアの英雄たちがのちに異民族の共同体の祖となったという伝説を取り上げて、ギリシアとその周辺世界との関係を探った第1章の研究では、歴史的記憶の反映と解釈した古典的な学説を根拠なきものと批判するばかりでなく、英雄たちの物語が異民族の起源の説明を与え彼らのエスニシティを形作ったとする近年の学説も、ギリシア中心的で、受容する側の能動性を軽視していると論者は退ける。そして、伝説の創造は、ギリシア人と周辺の諸民族が植民時代（前750年～550年頃）に外へと新しく広がった世界を自らの世界認識の中に秩序づける試みであったことを、残存する史料から論証した。19世紀以来のヨーロッパ中心主義の影響が色濃く反映したギリシア中心主義的な解釈がここでも見事に退けられ、議論が世界観のレベルに引き上げられた点が注目されよう。

伝説の機能をポリスという具体的な場で見ようとした第3章の研究では、ギリシアの代表的なポリス、アテナイで語られた国家的英雄テセウスの伝説を詳細に分析したが、従来の研究が伝説形成とポリスの政治指導層の意図との関わりを強調して、民衆は作られた伝説をただ受け入れるのみとの前提に立っているがごとき状態であったのに対して、論者は、市民たちもまたテセウスの伝説を欲し、英雄伝説という過去の共有がポリスへの帰属意識の醸成・維持に重要な役割を果たしたと主張する。政治や法制の研究だけでは解明できないギリシア都市国家の実像を明らかにした点で高く評価できよう。

最終章のプラトンの語る有名なアトランティス物語の分析は、哲学者の議論を踏まえつつも、歴史的に考証しようと試みたものである。アトランティス＝ミノア文明説に代表される、伝説を歴史的記憶へと還元する解釈がここでも批判され、第3章のテセウス伝説分析の成果などを踏まえて、プラトンの意図や彼が伝説という手段を用いた理由が分析されている。この伝説は本論文の他の章で取り上げられた伝説と性格が違うという点をより強く意識し、哲学者の研究にさらに学んだ上で歴史学の立場からの考究であることを一層明確にすれば、古代ギリシアの伝説の機能の解釈としてたいへん貴重な分析となると考えられる。

本論文は平易な文章できわめて明快に叙述され、先行研究の紹介と批判もしっかりしており、史料の検討にも不備はない。ただ、望まれる点がないわけではない。アテナイで崇拜され、国家と民主政の創造者として崇拜されたのがなぜテセウスであったのかという点については今少し立ち入った説明が必要であり、また先行研究の紹介と批判に比して、それらに続く自説の展開に若干迫力を欠く論点の一部が見られたところも気になった。しかし、これらの点は論者の今後の研究によって容易に改善されるものと思われ、本論文が鮮やかに提示した研究の成果を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年2月21日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。